

令和8年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査実施月日 令和8年4月23日(木)

3 対象学年 女川町立女川小学校第6学年児童38名 当日実施児童 国語・算数：36名、質問紙：38名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、算数
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	宮城県との比較	全国との比較
本校の国語	やや上回っている(△)	同程度
本校の算数	やや上回っている(△)	やや下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「情報の扱い方に関する事項」の問題は、全国平均・県平均を大きく上回った。
- ・「読むこと」の内容は、正答率が全国平均・県平均をやや上回った。
- ・記述式で答える問題で県平均をやや上回り、全国平均と同程度の正答率であった。
- ・いずれの問題でも、無回答率が非常に低かった。

(課題)

- ・「思考力、判断力、表現力等」に関する全7問中4問が全国平均を下回る正答率であった。中でも、「話すこと・聞くこと」に関しては、全国平均との差が目立ち、1二(2)「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる」という問題では、顕著な差があった。
- ・「書くこと」に関して全国平均・県平均をやや下回った。特に、2一「筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができるかどうかをみる」の問題で、差が大きかった。

②指導改善のポイント

- ・「知識・技能」における漢字指導については、引き続き反復して取り組むことを継続させて学びの定着を図る。その中でも、同じ漢字・同じ熟語のみを繰り返して書くのではなく、教科書で取り上げられる様々な用例・熟語を取り上げて漢字を書かせることで、児童の語彙を増やすとともに日常的に漢字を適切に用いる能力を一層高めていく。
- ・結果が上向いている「読むこと」に関して、目的に応じて文章と図表などの複数の資料を結び付けながら読むことや、文章全体の構成を捉えながら要旨を把握する読み取りの機会を更に充実させていく。特に、目的に応じて複数の資料を同時に読むことや、文章を戻ったり進んだりしながら全体を読むことについて、重点的に鍛えていきたい。国語科の授業はもちろんのこと、業前の「読書タイム」や「スキルタイム」を活用しながら、読後に文章の要旨を問う働き掛けを行ったり複数の資料を提示して問題解決に取り組ませたりするなど、読み取りの負荷を高める意図的な場面設定を全校で進めていく。また、今後も児童の読書習慣の更なる定着に向けて、図書館教育の充実を図るとともに、家庭と連携しながら「家読の日」などの取組を続けていく。
- ・顕著な差が見られた「話すこと・聞くこと」に関して、話の要旨を捉えるということに執着するのではなく、話し手の意図や願いを考えながら聞くという学習活動を充実させたい。「どのようなことを話しているのか」だけではなく、「どのように話しているのか」「考えが伝わるように、どのような工夫をしているのか」という視点で他者の話を聞くことを習慣付けることで、分かりやすく伝えようとする話し手の意図や願いについて思考を深めながら、話し手としての表現力を高められると期待できる。そのためにも、国語科の学習はもちろん他の教科等でも、また学級活動や全校集会の機会に、話し手の意図や願いに目を向けさせる問い掛けを教員が積極的に行っていくようにする。
- ・課題に挙げられる「書くこと」に関しては、自分の考えが伝わるような文章となるよう、文章の構成に気を付けながら書く活動を十分に設定していく。その際、漫然と書かせるのではなく、「順序を明確にする」「伝えたいことの中心を明確にする（内容のまとめりとに分ける）」「原因と結果を明らかにする」などの方法を具体的に示すことで、児童が主体的・意図的に文章構成を工夫することができるようにする。そのためにも、各学年で配置されている「書くこと」に関する単元において、「何を書くのか」ではなく「どのように書くのか」という目標を教員が確実に押さえた上で指導することができるように十分な教材研究を今後行っていく。また、文章の長さにも児童の意識を向けさせ、様々な教科等において豊富な文章量で自分の考えを表現する機会を増やしていく。

③質問紙から

- ・「国語の勉強は得意ですか」「国語の勉強は好きですか」という質問に肯定的な回答をした児童の割合は、県平均・全国平均を上回った。また、国語科の学習が将来に役立つと全員が肯定的に捉えており、児童が国語の学習を好意的に感じていることが分かった。
- ・「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問には、県平均・全国平均を大きく上回る約97%の児童が肯定的な回答をした。また、国語科の授業における教員の関わりについての質問にも、県平均・全国平均より高い割合で多くの児童が肯定的に答えている。このことから、普段の授業から児童が自身の学習状況や教員の働き掛けを前向きに捉えていることが分かる。今後も、丁寧な見取りに基づく適切な支援を組織的に進めていきたい。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・領域別に見ると、「データの活用」の問題の正答率が県平均・全国平均を上回った。特に、4 (1)「示された情報を基に、数量の関係に着目して、条件に合う時間を求めることができるかどうかをみる」の問題で大きく上回っている。
- ・国語では課題として挙げられる「思考・判断・表現」の観点で、県平均・全国平均を上回った。
- ・記述式の問題で、県平均を大きく上回った。

(課題)

- ・「変化と関係」の領域では、正答率が全国平均を大きく下回った。
- ・「知識・技能」の観点の問題で、正答率が低くなっている。
- ・1 (2)「直方体の箱の形を構成する面について理解しているかどうかをみる」、2 (2)「百分率で表された割合と比較量から、基準量を求めることができるかどうかをみる」のいずれの問題も、県平均・全国平均より正答率が大きく下回った。

②指導改善のポイント

- ・算数科は領域ごとに学習内容が緻密に系統立てられていることを、教員が改めて自覚するようにする。特に、今年度の結果から課題と言える「測定」と「変化と関係」の領域を中心に、授業者が学習内容について学年間の系統を十分に意識して授業づくりに臨むようにする。
- ・「図形」の領域では、図形の構成要素や単位面積・単位体積の大きさを正しく理解することが求められる。そのために、教材・教具の工夫を図り、具体物の操作を通して理解することを促していく。例えば、ひごや球を用いて直方体や立方体を作ったり、1 cm³のブロックを積み重ねて様々な立体図形に仕立てたりする。そうすることで、実感を伴った学習内容の定着を目指す。また、「図形」の領域の授業で見られる“面積を求める公式を児童が暗記するための指導”のように、問題を処理するためには公式を覚えないといけないという考え方が教員には根強い。しかし、目指したい学力は“公式を覚えること”ではなく“必要に応じて公式を使いこなすこと”だと考える。このことを授業者が十分に認識し、「公式を暗記するための指導」を「公式を使いこなすための指導」に転換し、児童が必要な公式を主体的に選びながら問題解決に取り組む学習活動を充実させていく。
- ・「変化と関係」の領域では、基準量と比較量、割合の関係を正しく捉えるため、問題場面の設定において日常生活の事象を取り入れるなどの工夫をするとともに、言葉や図、式を関連付けながら数量の関係を考察することができるよう引き続き指導していく。特に、低学年のうちから児童にテープ図や線分図を用いることに慣れさせ、高学年では数直線を用いて立式の根拠や数量の関係を説明することができるよう働き掛けていく。
- ・国語科の学習と同様に、言葉や図、式を関連付けながら自分の考えを相手に伝えたり、提示された条件に合わせて問題を処理したりする力を更に高めていきたい。そのためにも、様々な形式の問題に取り組ませることで、指定された形式での解答ができるように思考力・判断力・表現力を一層向上させていきたい。

③質問紙から

- ・「算数の勉強が好き」という回答は約6割であり、「算数の授業内容はよく分かる」という回答は約8割であった。いずれも全国平均と同程度であり、算数の学習を好意的に捉えている児童

が一定数いることが分かる。今後も授業改善に取り組みながら、学習における児童の主体性や意欲の更なる高まりを目指していく。

- ・「5年生までに受けた授業では、算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていましたか」や「5年生までに受けた授業では、算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えましたか」という質問で肯定的な回答をした児童の割合が、県平均・全国平均を上回った。このことから、児童にとって活用について実感があることや、粘り強く学習に取り組もうとする意識の高さが分かる。そのような児童の姿や意識を教員が称賛しながら、この傾向を更に伸ばしていきたい。

7 児童質問紙調査結果から（○成果、▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- 95%以上の児童が「朝食を食べる」と回答し、85%以上の児童が「毎日同じ時刻に寝る・起きる」と回答するなど、基本的な生活習慣が身に付いていることが分かった。
- 5年生までの授業に関する質問において、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ」、「各教科等で学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行った」、「自分にあった考え方、教材、学習時間などになっていた」と肯定的に考えている児童の割合が県平均・全国平均を大きく上回っている。
- 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」、「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」の質問で、肯定的な回答をした児童の割合が県平均・全国平均を上回った。他者と協働的に学ぶことや、他者を尊重しながら課題解決を図ることについて、児童に定着してきていることが分かった。
- 平日に1時間以上家庭学習をする児童は約58%で、県平均・全国平均を上回った。家庭学習の習慣化が進んでいることが分かる。
- ▲スマートフォンなどを利用したSNS利用や動画視聴の1日あたりの時間が、県平均・全国平均より多い傾向にあることが分かった。適切な利用や時間制限について、児童や保護者への継続的な呼び掛け・働き掛けが必要ある。
- ▲平日に「1時間以上」読書をしていると回答した児童は5%程度で、約8割の児童が「30分未満」であった。
- ▲5年生までの授業で「ICT機器を使用した頻度」について、「ほぼ毎日」と回答した児童が約1割であった（県平均は5割弱）。また、ICT機器の活用によってできることを問う質問については、否定的な回答をする児童の割合が多い傾向であった。

（2）規範意識・自己有用感について

- 全ての児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することができている。
- 8割以上の児童が「地域や社会をよくするためにしてみたいことがある」と前向きに回答し、県平均・全国平均を上回った。
- 「将来の夢や目標を持っているか」の質問では、肯定的な回答をした児童の割合が約9割であり、県平均・全国平均を上回った。
- ▲約84%の児童が「自分にはよいところがある」と前向きに考えているものの、県平均・全国

平均をやや下回った。

- ▲自分と違う意見について考えることに楽しさを感じる児童の割合が7割に満たず、県平均・全国平均を大きく下回った。

8 今後の取組

前述の各教科の指導改善のポイントに加え、女川町教育施策ロードマップの取組の更なる徹底を図る。また、(1)～(3)に挙げる取組についても継続して実施していくことで、教育指導の充実や学習状況の改善を目指す。

(1) 授業改善

- ・宮城県教育委員会から示されている「子供の学びを支援する5つの提言～自立した学習者の育成を目指して～」を全校で確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。
- ・全ての教科等において児童の思考や文脈に合わせた単元の構想・展開を行い、問題解決的な学習を通して児童の学びを生み出すようにする。そのために、授業者は「教材研究を深めること」「ねらい(目標)を明確に捉えること」「発問・助言にこだわること」「適用問題や振り返りの時間を充実すること」を徹底する。
- ・探究的な学習の強化に力を入れていく。特に、学習方法を主体的に選択したり、経過を踏まえて学習の見通しを調整したりする展開を単元内に位置付け、「学習の個性化」を促すようにする。さらに、教員が「指導の個別化」を進め、丁寧な見取りに基づいて児童一人一人の学びに合わせた手立てを講じることを目指す。
- ・校内研究において教員の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。そのためにも、普段から互いに授業を見合うことを始め、授業づくりについて語り合える職員室の雰囲気醸成していく。
- ・算数科の学習における授業形態(女川スタイル)を日々の指導で実践していく。適用問題に取り組む時間を十分に確保したり、協働的に課題に取り組むことができる授業を展開したりしていくことで、児童一人一人が分かったと実感できるようにしていく。また、児童にとって該当学年の学習内容が年度内に確実に定着化するよう、見通しを持って学習進度を調整し、単元末や年度末に十分に習熟を図る時間を確保できるようにする。
- ・目的や内容に応じて、児童がタブレット端末の利用について主体的に判断しながら学びを深めることを目指し、タブレット端末を活用した授業の日常化を図る。
- ・A I型学習教材(キュービナ)を積極的に活用し、反復的に学習に取り組ませるほか、未定着である内容を選択して問題解決に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。
- ・中学校教員の乗り入れ指導を実施する教科に限定せず、他教科においても教科担任制を引き続き実施するなど、児童の実態に即して様々な指導形態を柔軟に取り入れていく。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

① 基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」(基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事)を全校児童で常時意識させるとともに、情報モラル教室といった外部講師による親子学習会を行うなど、家庭に対しても働き掛けていく。
- ・「スマイルタイム」(健康や生活習慣を確立するために、養護担当が中心となって指導にあ

たる時間)を定期的に設け、児童の基本的な生活習慣を一層確立させるとともに、その様子を保健だよりや学校ホームページで発信し、家庭に対しても啓発していく。

②自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・女川生活実学（総合的な学習の時間や志教育との関連）の中で職場体験学習や校外学習などを実施し、勤労観や社会性を養う体験活動を充実させる。
- ・高学年では、学校の中心として委員会活動や縦割り活動、各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、称賛される機会を設ける。特に、児童の善い行動を教員が称賛する「グッジョブカード」の取組を充実させていく。

③家庭学習の一層の習慣化

- ・家庭学習の内容は授業と関連付いたものとし、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など、児童の実態や学習の進捗状況を踏まえたものとする。
- ・家庭学習においても個に応じた取組ができるように、タブレット端末やA I型学習教材（キュービナ）を活用しながら、関心のある内容や苦手としている内容など、児童が主体的に選択して取り組むことのできる課題を設定する。

(3) 女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

①中学校との連携

- ・校内研究の主題を共通のものとするすることで、9年間を見通した指導を行う。
- ・小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導における9年間のシラバスを活用し、系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行っていく。

②女川向学館との連携

- ・主に高学年の算数科で定期的実施する補充的な学習において、女川向学館のスタッフに来校していただき、学習支援を行う。
- ・女川町教育委員会生涯学習係が運営している「おながわプラス」において、各学年の担任と情報交換を行いながら、補充的な学習を実施し学習支援を行う。
- ・各種検定において、女川向学館の実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かして探究的な学びを得られるようにする。
- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深めて「家読の日」の啓発を行うことで、読書をしたり新聞を読んだりすることを習慣化させ、読解力の向上の一助とする。